

第 26 回 高橋記念賞受賞者表彰

高橋記念賞は、故高橋愛次氏の功労を記念し、旧㈱軽金属協会および旧軽金属精錬会を経由して遺族および扶桑軽合金株式会社（現：株式会社アーレスティ）より寄贈された基金によりアルミニウム合金鋳物・ダイカスト製品の製造ならびに関連のある工業技術の進歩発展に寄与した現場技能職を対象に贈られる。高橋記念賞選考委員会（委員長 池野 進）の審査を経て、9月18日（木）に開催された㈱軽金属学会第56回理事会において慎重審議の結果、梅本保行君、川野原敏夫君の2名の授賞を決定、㈱軽金属学会第105回秋期大会第1日目の11月21日（金）に日本大学において表彰式を挙行了た。

受賞者



梅本 保行君
(㈱神戸製鋼所)

表彰理由

梅本 保行君は、昭和43年に㈱神戸製鋼所に入社以来35年間、一貫して圧延用アルミニウム合金スラブの溶解・鋳造業務に従事してきた。その間に造塊品種は100種を超え、鋳造スラブサイズも最大厚さは300mmから630mmへ、最大幅は1,000mmから2,230mmへと大型化されたが、これらに対する鋳造技術の確立、品質改善および生産性向上に積極的に取り組み、アルミ板材の需要拡大に大きな貢献をしている。特に、DC鋳造における世界最大幅のキャン材用3004合金スラブの造塊技術の開発は、圧延ラインの生産性の向上を可能とし、キャン材製造コストの低減に大きな貢献をしている。厚板分野では、スラブの大型化に伴うアルミ溶湯中の水素ガスの影響、鋳造組織の粗大化の改善に尽力し、厚板用5XXX系合金スラブの造塊を可能としている。また、航空機や新幹線の高強度部材としての7050合金は鋳造中や鋳造完了後に内部応力による割れが発生しやすく、安定生産とスラブの大型化が困難とされていた。この困難な鋳造の安定化に取り組み、不良率を5%以下にまで引き下げたことは、航空機や新幹線部材への採用が可能となり、これらの高強度、軽量化に多大な貢献を果たしている。現在も溶解・鋳造技術の現場において、豊かな経験を生かしながら後進の指導・育成に尽力している。

受賞者



川野原 敏夫君
(神鋼鋼線工業㈱)

表彰理由

川野原敏夫君は、昭和38年に神鋼鋼線工業㈱に入社し、鋼線の品質保証業務に従事後、昭和59年から、今日まで20年にわたり、発泡アルミニウムの開発に携わり、製造の責任者として、同製品の工業化、実用化、新用途開発に多大な貢献を果たして来ている。

開発当初は、国内には参考とすべき教科書、文献、指導者等が全くない未踏の技術領域において、その技術確立に意欲的に取り組み、持ち前の発想力を生かした工夫と現場での試行錯誤を重ね、独自の多軸多段羽根による攪拌製造法を考案し、他社に先駆けて工業化に結実させた。

また、発泡アルミニウムに特殊な加工を施して通気性多孔体にすることで吸音効果を飛躍的に向上させることに成功し、リサイクル可能で長寿命の環境にやさしい軽量吸音材を創出した。さらに発泡アルミニウムの圧縮および曲げ加工限界を見極めるとともにその加工方法を開発し、用途の拡大に貢献した。現在も豊富な経験を生かし、製造技術の維持、改善に手腕を発揮するとともに、現場の長として後進の指導・育成に尽力している。